

平成 24 年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	24K22	氏名	宮沢 英輔
研究主題	「気にかかる児童」への支援を力付けるコンサルテーション		
所属校	江戸川区立江戸川小学校	派遣先	早稲田大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>小学校の通常学級において特別な教育的ニーズのある児童を支援する中心となるのは学級担任である。学級担任は児童の特性理解や支援の振り返りを客観的に行うことが求められるが、実際には学級担任が児童への支援に負担感や無力感をもち、一人で問題を抱え込む場合が多くある。その背景には、児童の反応をもとに児童の捉え方や指導・支援の在り方を内省せず、問題を客観的に理解できない実態があると考えられる。</p> <p>そこで、通常学級に在籍する「気にかかる児童」に対して学級担任が主体的に支援するようになるためのコンサルテーションの進め方を検討し、学級担任の支援力向上を図る方策を追究する。</p> <p>児童への支援の効果を分析するコンサルテーションの実践を踏まえて学級担任が自発的に児童を支援する促進要因を抽出し、それと学級担任の内省的思考との関連について検討する。また、特別支援教育コーディネーターとの協力関係を重視してコンサルテーションを進めた成果を基に、学級担任への支援が校内で組織化されるための重点について考察する。</p>
II 研究の方法	<p>特別支援教育を推進する校内体制や学校コンサルテーションに関する先行研究を収集・検討し、問題関心の整理を行った。また、発達障害の理解と指導実践、カウンセリングの理論と実践、心理教育的アセスメントと個別の指導計画の活用、特別支援教育のシステム構築に関する講義・演習に参加し、理論的背景を理解するとともにコンサルテーションを行う実践力を高めた。</p> <p>実践では筆者がコンサルタントとなり、公立小学校1学年担任1名に対してコンサルテーションを15回行った。</p> <p>学級の実態観察を基に担任が行っている有効な支援をフィードバックする、支援による児童の変化を担任と分析する、支援をリストアップして担任が有効な支援を行った事実を客観視できるようにする、といったコンサルタントの関わりによって、コンサルティである担任が自発的に児童への支援を工夫するようになることと仮説を設定した。担任が児童の特性理解や支援の振り返りを客観的に進めることで児童への支援が変化する様子を見取り、担任の内省的思考の深まりについて検証した。</p> <p>また、コンサルテーションの進捗状況や見通しについて管理職や特別支援教育コーディネーターと話し合う場を定期的に設定し、学級担任の意識や支援を変える仕組みについて共通理解を図った。</p>

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>コンサルティである担任は教室を飛び出したり大声を出したりする複数児童への対応に苦慮し、一斉指導で注意や叱責を重ねる状況にあった。</p> <p>児童が学習に集中したり落ち着いて働きかけに反応したりした様子を担任に伝え、指導場面で担任が既にできている支援を価値付けたことで、担任は児童個々を具体的に褒める声かけを行うようになった。結果、学級集団や児童が落ち着くようになったと担任は実感し、注意や叱責に代わるこれらの働き掛けや支援が有効であると共通理解した。</p> <p>次に、児童が変化した根拠を担任と分析しながら有効な支援をリストに整理し、そこから担任が重点を置く支援を選んで実施するようになった。そのことで、担任が児童の特性をよさとして学級経営や授業に生かす様子が日常化し、授業中における児童の離席や私語がほとんど見られなくなった。また、支援するタイミングや児童への共感に着目して支援を改善することが担任から提案されるようになった。実態分析を基に重点を置く支援を振り返ったことで担任が支援の効果を事実として理解し、支援のリストアップによって担任が自己効力感を高めて児童を支援するようになった様子が観察された。</p> <p>コンサルテーションにおいて担任の客観的な事実認知を引き出し、担任の要請を基に支援の相談を重ねるにつれて、担任に対する児童の愛着が高まり、学級全体が落ち着いて活動に取り組む雰囲気が定着した。また、担任が個別支援の方法を一斉指導へ自発的に生かすようになり、児童の反応の仕方や支援の進め方についての具体的な相談が増えたことから、担任が児童を捉える視点が学級の中に潜在するニーズ（困り感）へと移り、「気にかかる」と認識する児童の範囲が広がる様子を観察できた。このように、コンサルテーションを通して内省が深まっている様子が推察されたが、担任がそれについて分析を進めることは難しかった。また、担任からはリストを離れて個別支援を考えることに難しさを感じる声が聞かれた。</p> <p>コンサルテーションによる担任の変容を特別支援教育コーディネーターと共通理解し、校内での教員研修や保護者との意見交流の機会を具体化させた。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>担任が児童との関わりに苦慮している状況でできている支援を価値付けたこと、有効な支援をリストアップしながらコンサルテーションを進めたことは担任が自己効力感をもって児童を支援するうえで有効であった。自己効力感は担任が自らの児童理解や指導を内省するきっかけとなり、児童が変化した事実を分析する協力者としてコンサルタントが関わることで担任は支援の進め方を客観的に理解し、自発的に児童を支援するようになったと考える。客観性に伴う内省が生じたことで、「気にかかる児童」を捉える担任の眼差しが変容したと推察される。今後、個別の指導計画の作成・活用や教員研修に焦点を当て、担任の内省的思考を促す仕組みを校内で組織化することが必要である。</p>